

補文標識「と」「こと」と命題の規範的構造具現

著者	阿部 忍
雑誌名	神戸山手大学紀要
号	11
ページ	75-87
発行年	2009-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000704/

補文標識「と」「こと」と命題の規範的構造具現

Japanese Complementizers *To, Koto*, and Canonical Structural Realization of Propositions

阿 部 忍

キーワード：補文標識、叙実性、対象命題、産出命題、規範的構造具現

要 約

補文標識「と」「こと」の選択について、補足節をとる述語の叙実性から説明しようとする従来の研究では、「知る」などの叙実述語が「と」をとるという事実を説明できない。本稿では、「知る」だけを例外として扱うことはできないということを指摘し、補足節をとる述語を「固定叙実述語」「反叙実述語」「可変叙実述語」「非叙実述語」の4種類に整理する。その上で、述語の項となる命題を「対象命題」と「産出命題」に分類することを提案し、また「対象命題」「産出命題」それぞれの規範的構造具現を仮定することにより、「と」「こと」および命題として解釈される名詞句の分布が正しく予測されることをみる。さらに、補足節を代用する「そう」「そうと」といった形式の文法的、意味的なふるまいを記述する。

0. はじめに

補足節¹⁾をマークする補文標識の代表的なものとして、「と」「こと」「の」がある。たとえば、次の(1)を見てみよう。

- (1) a. ユウキはユイが数学の天才だと思っている。
- b. ユイはユウキが浮気な性格であることを見抜いている。
- c. 生徒たちは先生が廊下で滑って転ぶのを見た。

補足節はaでは「と」でマークされており、b、cではそれぞれ「こと」「の」でマークされている。

問題となるのは、どのような条件で「と」「こと」「の」がそれぞれ現れるのかということ、および各形式の出現にともなう意味の違いである。

ところで、次の(2)で示されるように、「と」でマークされた節に対する代用形としては「そう」があり、「こと」「の」でマークされた節に対する代用形には「それ」がある。

- (2) a. ユウキはユイが数学の天才だと思っている。他の友人たちもそう思っている。
- b. ユイはユウキが浮気な性格であることを見抜いている。他の友人たちもそれを見抜いている。

c. 生徒たちは先生が廊下で滑って転ぶのを見た。ちょうど通りかかった用務員の
おじさんもそれを見た。

また、「と」でマークされた節に対しては、「そうと」という代用形もある。

(3) ユウキはユイが貝が苦手だとは知らなかった。ミキもそうとは知らなかった。

そこで、たとえば「そう」と「そうと」の違いがどのようなところにあるのかが、また問題となる。

本稿では、補文標識「と」「こと」を含む構造を中心に、その意味的、統語的な性質を、述語の叙実性などを手がかりに考察する。

まず1で従来の研究と問題点を整理し、述語の叙実性と補文標識の関係を洗い直す。

2では述語が項として要求する命題を「対象命題」と「産出命題」に分類することを提案し、それが1で言及された文法現象をどのように説明するかを見る。また、命題の種類に応じた規範的構造具現を仮定することにより、「と」「こと」と名詞句の分布が正しく予測できることを主張する。

3では「そう」「そうと」などの代用形の文法的、意味的なふるまいを記述する。

4はまとめである。

1. 従来の研究と問題点

1. 1 久野 (1973)

この分野での先駆的な研究である久野 (1973) は、動詞の目的節²⁾をマークする3つの形式「コト (ヲ)、ノ (ヲ)、ト」のあいだの違いについて論じ (同書、第17章)、その中で、以下のように述べている。

「コト／ノ」で終わる名詞節は、その節が表す動作、状態、出来事が真であるという話者の前提を含んでいるが、「ト」で終わる名詞節には、そのような前提が含まれていない。(p.137)

久野の説明にしたがうと、たとえば、次の(4)において、

(4) a. ユウキはユイが努力家だと思っている。

b. *ユウキはユイが努力家であることを思っている。

「思う」は、命題「ユイが努力家だ」が真であるという話者の前提を含まないから、「こと」をとることができない、ということになる。

また、(5)において、

(5) a. ユイはユウキが臆病者であることを忘れていた。

b. *ユイはユウキが臆病者であると忘れていた。

「忘れる」は、命題「ユウキが臆病者である」が真であるという話者の前提を含んでいるから、「と」をとることができない、ということになる。

ところで久野は、上記の原則の唯一の例外として「知る」を挙げている。久野によれば、

「知る」は意味上前提を含む動詞であり、普通「コト／ノ」をとるが、或る特定のパターンの中では、「ト」を伴って表われることがある。(前書、p.139)

ということである。たとえば、以下の(6)において、「知る」は「と」をとっているが、a～c はいずれも文法的な文である。

(6) a. 私はミキが語学の天才だとその時知った。

b. 私がミキが語学の天才だと知ったのはその時だった。

c. ミキがこんなに頭がいいとは知りませんでした。

しかし、なぜ(6)のような文が文法的であるのか、その理由は示されていない。

「知る」が意味上前提を含む動詞でありながら「と」をとるという事実は、次に取りあげる井上(1976)の記述に存する問題点に関係してくる。

1. 2 井上(1976)

井上(1976)は、補文標識「と」「の」「こと」の選択と主節述語の意味について、詳細かつ重要な記述を行っている³⁾。そこでは、主節述語は「叙実述語」「非叙実述語」「反叙実述語」など9種類に分類される。その中から、本稿の議論に直接関係する3種類を以下に取りあげる⁴⁾。

I. 叙実述語：叙実述語は、補文⁵⁾の表す命題が真であるという前提をもつ。この前提は、主節が否定文や疑問文になっても変わらない(前述の久野の「意味上前提を含む動詞」に相当)。たとえば次の(7)では、主節の述語(「かくす」)は叙実述語であり、a、b、c いずれにおいても、下線部の表す命題が真であるという前提には変わりがない。

(7) ユウキはミキが自分にメールを送ってきたことを

- $$\left\{ \begin{array}{l} \text{a. かくしていた。} \\ \text{b. かくさなかった。} \\ \text{c. かくしていたの?} \end{array} \right\}$$

II. 非叙実述語：上記のような性質をもたない述語を非叙実述語と呼ぶ。

III. 反叙実述語：補文が偽であること前提とする述語を反叙実述語と呼ぶ。

以上の分類を理解した上で、井上(1976)の記述のうち、本稿の議論と関係する部分を以下のようにまとめてみよう。

イ) 叙実述語は「と」をとらない。(例：「忘れる、思い出す、知る、分かる、悟る」)

ロ) 非叙実述語は「と」しかとらない。(例：「考える、思う、推論する、推察する」)

ハ) 反叙実述語は「と」しかとらない。(例：「思い違いする、誤解する、早合点する」)

二) 「こと」あるいは「の」をとると叙実述語になり、「と」をとると非叙実述語になるものが多い。(例：「後悔する、なげく、自白する、報告する、伝える、話す」)

ホ) 叙実性と無関係なものも少なくない⁶⁾。それらの補文はすべて未来を表し、完了時制を

とることができない。(例：「期待する、願う、望む、約束する、計画する、予言する、予告する」)

さて、ここで注目したいのは、イ)の叙実述語の例として「知る」が挙げられていることである。しかし先の1. 1で見たとおり、「知る」は「と」をとることがある。これは、叙実述語が「と」をとらないという記述と矛盾する。久野(1973)は「知る」を唯一の例外としているのであるが、井上(1976)は脚注で以下のように説明している。

「知る」は「ストが回避されたとは、知らなかった」のように、「と」を取る場合がある。この場合も叙実性とは無関係に、むしろ直接話法的な表現になる。(同書、p.254、脚注20))

しかしこのような説明はとうてい説得的とはいいがたい。その理由を次の1.3で述べる。

1. 3 叙実述語が「と」をとる場合

まず、「知る」が「と」をとる場合に、井上(1976)の説明に反してけっして直接話法的とは言えないことは、たとえば「今日」のような直示表現のふるまいを観察すれば明らかになる。次の(8)を見てみよう。

(8) a. 今日のストは回避された。

b. ユカは月曜の正午の段階では、その日のストが回避されたとは知らなかった。

c. ユカは月曜の正午の段階では、今日のストが回避されたとは知らなかった。

(8)において、aが月曜に成立したとして、この命題に対応する内容を「と」でマークして主節に埋め込んだ場合、bのように「今日」は「その日」などに変換される。もしcのように「今日」を変換せずにそのまま埋め込んだ場合は、「今日」は月曜ではなくcが発話された日を指すことになり、ユカが超能力者でもない限り当たり前のことを言っているにすぎない奇妙な文になってしまう。

以上の事実は、「知る」が「と」をとった場合の補足節が直接話法的ではないことを示している。

また、井上が叙実述語の例として挙げている「忘れる、思い出す、知る、分かる、悟る」を慎重に検討してみると、「忘れる」以外は、「知る」も含めてすべて「と」をとれるということが分かる。以下の(9)～(13)を観察してみよう。

(9) a. ユウキは3月3日がユイの誕生日であることを忘れていた。

b. *ユウキは3月3日がユイの誕生日であると忘れていた。

c. *ユウキは3月3日がユイの誕生日であると忘れていなかった。

(10) a. ユイは次の水曜日にリスニングのテストがあることを思い出した。

b. ユイは次の水曜日にリスニングのテストがあると思い出した。

c. ユイは次の水曜日にリスニングのテストがあると思い出さなかった。

(11) a. ミキはユイの母親が数学者であることを知っている。

- b. ミキはユイの母親が数学者であると知っている。
- c. ミキはユイの母親が数学者であると知らなかった。
- (12) a. ユカにはチアリーディングがきついスポーツであることが分かっていた。
- b. ユカにはチアリーディングがきついスポーツであると分かっていた。
- c. ユカにはチアリーディングがきついスポーツであると分かっていなかった。
- (13) a. ヒロは人を愛することがとても大切であることを悟った。
- b. ヒロは人を愛することがとても大切であると悟った。
- c. ヒロは人を愛することがとても大切であると悟らなかった。

「忘れる」と「と」の組み合わせである(9)のb、cがまったく容認不可能であるのに対し、(10)～(13)の各b、cは容認可能であり⁷⁾、補足節が表す命題が真であるという前提も変わらない。

さらに、この他にも「と」をとることができる叙実述語として「見抜く、見破る、看破する、察知する、気づく」などを挙げることができよう。

したがって、「知る」が“唯一の例外”ということではまったくなく、先述の、イ) 叙実述語は「と」をとらない、という記述はもはや正当化できない。

1. 4 非叙実述語が「と」以外をとる場合

ここでは、1. 2で挙げた井上(1976)の記述の要点の中の、ロ) 非叙実述語は「と」しかとらない、という点について、これも疑わしいということを見る。

まず、井上の挙げる非叙実述語の例「考える、思う、推論する、推察する」⁸⁾のうち、「推論する、推察する」は、次の(14)のように「こと」をとることがある。

- (14) a. ユイは三段論法でソクラテスが死ぬことを推論した。
- b. ユウキの顔色から、彼が真剣に悩んでいることが推察できた。

さらに、先述の記述の要点の中の、ホ) 叙実性と無関係なもの、についてであるが、叙実性と無関係ということは、これらは定義上非叙実述語として扱うことができるはずである。もしこの議論が正しければ、「と」以外をとることができる非叙実述語は数多くあるということになる。

1. 5 主節述語の叙実性と補文標識の関係についての再整理

以上を踏まえ、主節述語の叙実性と補文標識の関係について、以下のように整理し直してみよう。

- ①「**固定叙実述語**」：どの補文標識をとった場合でも叙実性を維持する述語を「固定叙実述語」と呼んでおく。固定叙実述語は「こと」や「の」をとることが多いが、「と」をとれるものもある。(例：「忘れる、思い出す、知る、分かる、悟る、見抜く、見破る、看破

する、察知する、気づく」)

②「**反叙実述語**」：反叙実述語は「と」しかとらない。(例：「思い違いする、誤解する、早合点する」)

③「**可変叙実述語**」：「こと」や「の」をとると叙実的になり、「と」をとると非叙実的になるものがある。これらの述語を「可変叙実述語」と呼んでおく。(例：「後悔する、なげく、自白する、報告する、伝える、話す」)

④「**非叙実述語**」：上記以外の述語は非叙実述語である。「と」「こと」「の」のいずれをとるかは様々である。(例：「考える、思う、推論する、推察する、期待する、願う、望む、約束する、計画する、予言する、予告する」)

注意すべきは、叙実性の観点から補文標識の選択が自動的に決定できるのは②の反叙実述語のケースだけということである。

したがって、たとえば「忘れる」が「と」をとらないのはなぜか、あるいは可変叙実述語が、共起する補文標識に応じて叙実的にも非叙実的にもなれるのはなぜか、といったことには、叙実性とはまた別の観点からの説明が必要となる。それについては、次の2で検討する。

2. 対象命題と産出命題

2. 1 対象命題と産出命題

述語が項としてとる主題役割は、単純には、たとえば以下の(15)のように表せる。

(15) a. 忘れる：＜動作主、命題＞

b. 知る：＜動作主、命題＞

c. 早合点する：＜動作主、命題＞

しかしこのままでは、「忘れる」が「こと」、「知る」が「こと」と「と」、そして「早合点する」が「と」をとるという現象を生み出すメカニズムが説明できない。もちろん、述語ごとにそれぞれとりうる補文標識を指定しておけば、記述的には問題ない。しかしそれでは現象を十分に説明したことにはならないだろう。

そこで、各述語が項として要求する命題を、2種類に分類することを提案する。

まず、「忘れる」「知る」の要求する命題は、忘れられる対象、知られる対象としての命題である。そこでこのような命題を「**対象命題**」と呼ぶことにする。

一方、「早合点する」の要求する命題は、早合点することにとまって産出される生産物としての命題である。そこでこのような命題を「**産出命題**」と呼ぶことにする。

この2種類の命題を以下の(16)のように定義しておく⁹⁾。

(16) a. **対象命題**：知覚・計算操作、または情報伝達の対象となる命題

b. **産出命題**：思考・言語活動にとまって生み出される命題

このような観点から、前節1. 5でまとめた①～⑤の例として挙げられている述語からいく

つかをピックアップし、どちらの命題をとるか、次の(17)のように記述してみよう。(右側の丸括弧内に、叙実性、および共起する補文標識についての情報を付しておく。また、議論を単純化するため「こと」と「の」は区別せずに「こと」で代表させる。)

- (17) a. 忘れる：＜対象命題＞ (①固定叙実、「こと」)
b. 知る：＜対象命題＞ / ＜産出命題＞ (①固定叙実、「こと」「と」)
c. 早合点する：＜産出命題＞ (②反叙実、「と」)
d. 後悔する：＜対象命題＞ / ＜産出命題＞ (③可変叙実、「こと」「と」)
e. 報告する：＜対象命題＞ / ＜産出命題＞ (③可変叙実、「こと」「と」)
f. 考える：＜産出命題＞ (④非叙実、「と」)
g. 約束する：＜対象命題＞ / ＜産出命題＞ (④非叙実、「こと」「と」)

(17)では「忘れる」だけが産出命題をとれない。これは「忘れる」が対象となる命題の記憶を“失う”ことを意味するがゆえに、“産出”と矛盾するからである。

一方、「知る」が対象命題だけでなく産出命題もとれるのは、対象となる命題の知覚の際に、思考・言語活動をともなうことがあるからであると考えられる。ただし、産出命題をとった場合も、「知る」はその命題が真であるという前提を維持する語彙の意味を有している。

また、「早合点する」が産出命題しかとれないのは、反叙実述語だからである。すなわち、「早合点する」は偽である命題を産出することをもっぱら意味している。

次に、「後悔する」「報告する」であるが、これらは対象命題に対する感情をもつ、あるいは対象命題を他者に伝えるという意味をもち、またそのような行為の別の側面として思考・言語活動をともなうので産出命題をとることもできる。対象命題をとった場合はその命題が真であるという前提をもつ。ただし、「後悔する」「報告する」は「知る」とは違ってその前提を常に維持するほどの強い語彙の意味があるわけではなく、産出命題をとった場合は非叙実的になるのである。

「考える」は思考・言語活動そのものであるので、基本的に産出命題をとる¹⁰⁾。

最後に「約束する」は、上の「後悔する」「報告する」と同様、対象命題をとる場合と産出命題をとる場合の両方の可能性をもつ。ただし、対象命題をとった場合も、その命題が真であるという前提はない。それはその命題が仮構された対象、概念であるにすぎないことを「約束する」が語彙的に意味しているからであろう。

2. 2 対象命題・産出命題と規範的構造具現

ここで、以下の(18)のような規範的構造具現を仮定しよう¹¹⁾。

(18) 命題の規範的構造具現

- a. ＜対象命題＞：「こと」でマークされた節、または名詞句¹²⁾として具現する。
b. ＜産出命題＞：「と」でマークされた節として具現する。

対象命題とは(16)で定義したように知覚・計算操作あるいは情報伝達の対象であり、名詞性をもった「こと」や名詞句として具現することによって概念化、対象化されると捉えることができる。

また、「と」は「引用の「と」」と言われるように、思考・言語活動にともなって生み出される産出命題を具現するにふさわしい形式といえる。

さて、上記(18a)によって、「忘れる」「知る」「後悔する」「報告する」「約束する」の対象命題が、「こと」でマークされた節や名詞句として具現する例を、以下(19)～(23)に示す。それぞれaの下線部が「こと」でマークされた節、bの下線部が名詞句である。

- (19) a. ユウキはダイスケとけんかしたことを忘れていた。
b. ユウキはダイスケとのけんかを忘れていた。
- (20) a. ユイはユウキが浮気したことを知っている。
b. ユイはユウキの浮気を知っている。
- (21) a. ユウキはミキとデートしたことを後悔している。
b. ユウキはミキとのデートを後悔している。
- (22) a. ヒロは先生に小論文コンテストで優秀したことを報告した。
b. ヒロは先生に小論文コンテスト優勝を報告した。
- (23) a. ユカはヒロに学園祭で協力することを約束した。
b. ユカはヒロに学園祭での協力を約束した。

一方、産出命題しか項としてとらない「早合点する」「考える」の場合は、命題は(18b)により「と」でマークされた節としてのみ具現する¹³⁾。

- (24) a. ユウキはユイが激怒していると早合点した。
b. *ユウキはユイの激怒を早合点した。
- (25) a. ヒロはユカが学園祭で派手な活躍をしてくれると考えている。
b. *ヒロはユカの学園祭での派手な活躍を考えている。

上の(24a)(25a)は「と」でマークされた節をとった容認可能な文であるが、名詞句で置き換えた(24b)(25b)はともに容認不可能である。

このように、(18)の規範的構造具現を仮定することによって、「と」「こと」と名詞句の分布を正しく予測することができる。

3. 補足節と代用形「そう」「そうと」

ここでは、補足節、特に「と」でマークされた節に対する代用形「そう」「そうと」について、その文法的ふるまいを記述する。

3. 1 「そう」

まず、冒頭の「0. はじめに」で取りあげた文(2)(3)を(26)(27)として再掲する。

- (26) a. ユウキはユイが数学の天才だと思っている。他の友人たちもそう思っている。
 b. ユイはユウキが浮気な性格であることを見抜いている。他の友人たちもそれを見抜いている。
 c. 生徒たちは先生が廊下で滑って転ぶのを見た。ちょうど通りかかった用務員のおじさんもそれを見た。

(27) ユウキはユイが貝が苦手だとは知らなかった。ミキもそうとは知らなかった。

(26) (27) から分かるように、「と」でマークされた節を代用する形式として「そう」「そうと」があり、「こと」「の」でマークされた節を代用する形式として「それ」がある。

ただし、「と」でマークされた節がいつでも「そう」でマークできるわけではない。次の(28)を見てみよう。

- (28) a. ミキはヒロが博学であると {思っている／考えている／知っている}
 b. ユイもそう {思っている／考えている}。
 c. *ユイもそう知っている。
 d. ユイもそうと {思っている／考えている／知っている}

(28c) から分かるように、「そう」と「知る」の組み合わせは容認性が低い。また、(28d)のように「そうと」を用いた場合には「思う」「考える」「知る」いずれも容認可能となる。

これは、次の(29)のような否定文にしたときも同様である。

- (29) a. ユイはヒロが天使のような性格だと {思っている／考えている／知っている}
 b. ダイスケはそうは {思っていない／考えていない}
 c. *ダイスケはそうは {知らない／知らなかった}
 d. ダイスケはそうとは {思っていない／考えていない／知らない／知らなかった}

なぜ「知る」は「そう」と共起しにくいのであろうか？

これには「そう」の持つ様態副詞としての性格が反映していると考えられる。次の(30)を観察してみよう。

- (30) a. そう投げればいい球がいくよ。
 b. ??そう居て。

(30a) では、様態副詞「そう」は「投げる」という動作の様態を表している。(30b)の「居る」のように多様性のある動きを表さない述語とは共起しにくい¹⁴⁾。つまり、ある程度多様性、柔軟性のある動きを表す述語でなければ、様態副詞「そう」とは共起しにくいと考えられる。

そこで、「と」でマークされた補足節に対する代用形としての「そう」にも同様の性格、つまり共起する述語が多様性、柔軟性のある動きを表すことを要求するといった選択制限があると仮定してみよう。

補足節をとる「知る」の意味を簡単に記述すると、「真である命題を知覚する」ということ

になろう。命題自体に多様性、柔軟性があっては真偽値は決定できない。また、「知る」の意味する知覚動作についても、知覚していない状態から知覚した状態への移行を表すだけであるので、多様性、柔軟性はほとんど無いと言ってよい。

つまり、「知る」の表す意味には多様性、柔軟性がないから代用形「そう」と共起できない、ということになる¹⁵⁾。

3. 2 「そうと」

ここではまず、「そうと」は肯定文より否定文の方がすわりがよいということは記述しておかなければならない。たとえば、上の(28d)と(29d)を比べてみると、(29d)のほうが自然な文であると感じられる。とはいえ、肯定文における「そうと」が容認不可というわけではない。

さて、「そうと」は「と」をとる述語のほとんどと共起できるようであるが、「後悔する」「なげく」「望む」「願う」との共起可能性については問題がある。次の(31)～(33)を見られたい。

- (31) a. ヒロはユウキとけんかすべきではなかったと後悔している。
b. ダイスケもそう後悔している。
c. *ダイスケもそうと後悔している。
d. ダイスケはそうは後悔していない。
e. ??ダイスケはそうとは後悔していない。
- (32) a. ミキは誰も自分をかまってくれないとなげいた。
b. ユカもそうなげいた。
c. *ユカもそうとなげいた。
d. ユカはそうはなげかなかった。
e. ?ユカはそうとはなげかなかった。
- (33) a. ユイはイギリスに留学したいと {望んでいる／願っている}。
b. ユカもそう {望んでいる／願っている}。
c. *ユカもそうと {望んでいる／願っている}。
d. ユカはそうは {望んでいない／願っていない}。
e. ??ユカはそうとは {望んでいない／願っていない}。

いずれも、程度の差はあれ「そうと」と共起した場合は容認可能性が低い。「後悔する、なげく、望む、願う」に共通する特徴は、これらが「と」をとる場合はいずれも補足節の表す内容が感情表出的だということである。それゆえ、補足節の内容をほぼダイレクトに表出する(34)のような文を作ることでもある。

- (34) a. ユウキとけんかすべきじゃなかった！
 b. 誰も私をかまってくれない！
 c. イギリスに留学したい！

ちなみに、次の(35)のように「と」の内容が命題とは言いがたい叫び声である場合も同様のコントラストが見られる。

- (35) a. ユイが「キャア！」と叫んだ。
 b. ミキもそう叫んだ。
 c. *ミキもそうと叫んだ。
 d. ミキはそうは叫ばなかった。
 e. ??ミキはそうとは叫ばなかった。

以上の観察から次のような仮説を立てておく。すなわち、「と」でマークされた節が何らかの判断を表す命題を内容とする場合に、その代用として「そうと」が用いられ、単に言語表現を代用する場合には「そう」しか用いられない。「そう」と「そうと」の機能を簡略化して記述すると、以下の(36)のようになろう。

- (36) 「そう」と「そうと」の機能
 i) 「そう」：言語表現の代用
 ii) 「そうと」：判断内容の代用

また、「そうと」が判断内容の代用機能を担うといった仮説に関連して、以下の(37)(38)が示すような現象も興味深い。

- (37) a. ユカはヒロが来る {ことを／と} 期待している。
 b. ユカはヒロが来る {ことを／*と} 望んでいる。
 c. ユカはヒロが来てほしいと {期待している／望んでいる}。
 (38) a. ミキも {それを／そう／そうと} 期待している。
 b. ミキも {それを／そう／*そうと} 望んでいる。

このようなコントラストは、「期待する」が「と」をとった場合は判断を含むことができ、「望む」はそのような判断を含まないと解釈すれば説明がつく。

3.3 遊離引用節構文

次の(39)のように、「と」でマークされた節がいったん区切られ、主節述語から遊離しているようにみえるケースがある。このような構文をここでは仮に「遊離引用節構文」と呼んでおく。

- (39) a. 先生は、ヒロなら最高の哲学者になれると、そう考えている。
 b. *先生は、ヒロなら最高の哲学者になれると、そうと考えている。

(39a) では遊離引用節を述語直前の「そう」が代用しているが、これを「そうと」で置き

換えた(39b)はまったく容認不可能である。

(39a)の「そう」が遊離した引用節の言語表現を忠実に代用するだけの役割を果たしているとするならば、「そうと」にはそのような機能が単に無いということかもしれない。より厳密な理論的分析については稿を改めることとし、ここでは現象を記述するにとどめておく。

4. まとめ

本稿では補文標識「と」「こと」を中心に、その統語的・意味的性質について考察し、以下のことを明らかにした。

- 1) 「知る」などの叙実述語が「と」をとる現象は、従来考えられていたような例外的なものではない。
- 2) 叙実性の観点から、補足節をとる述語は「固定叙実述語」「反叙実述語」「可変叙実述語」「非叙実述語」の4種類に整理できる。
- 3) 述語の項となる命題を「対象命題」と「産出命題」に分類し、それぞれに適用される規範的構造具現を仮定すれば、「と」「こと」および名詞句の分布を正しく予測できる。
- 4) 「そう」と「そうと」は置換不可能なケースがある。「そう」は動きに多様性、柔軟性のない述語である「知る」と共起しにくく、「そうと」は「後悔する、なげく、望む、願う」のような、「と」でマークされた節が感情表出的な内容となる述語とは共起しにくい。
- 5) 遊離引用節構文において、「そう」を「そうと」に置き換えることは不可能である。

なお、本稿では「の」についてはほとんど言及しなかったが、「こと」についての記述の主要な部分は「の」にもあてはまると考えられる。したがって、たとえば対象命題の規範的構造具現についても、 $[+N, -V]$ といった素性を指定することにより「こと」「の」を同時に扱うことも可能であろう。そのような可能性の追求も含めて考えるべきことは多いが、それらの課題についてはまた機会を改めることとする。

注

- 1) 補足節についての包括的な記述については日本語記述文法研究会編(2008)の第2章(pp.13-42)を参照のこと。
- 2) 久野の「動詞の目的節」とは、補足節のうち、動詞の目的語に相当するものである。
- 3) 第3章(特に、3. 2. 6. 補文標識「と」「の」「こと」)を参照のこと。
- 4) 井上はこれらの他、次の6種類の非叙実述語を挙げている。「含意述語」「否定含意述語」「半含意述語」「否定半含意述語」「部分含意述語」「否定部分含意述語」(前書、pp.252-253)
- 5) 本稿の「補足節」に概ね該当する。
- 6) 井上(1976)では、正確には「内容節をとる述語で叙実性と無関係なものも少なくない」(同書、p.255、L.6)としている。「内容節」について詳しくは、特に同書pp.233-240を参照のこと。ここでは、内容節をとる述語は「と」をとる、ということを理解しておけばよい。

- 7) (10) ~ (13) の各 b、c の中には、やや不安定に感じられるものもあるが、適切な文脈を補うことで容認性が向上する。たとえば、(10 c) は、そのままではやや不安定に感じられるが、次の (i) のようにするとかなり容認可能な文となる。
- (i). ユイは次の水曜日にリスニングのテストがあるとはつゆほども思い出さなかった。
- 8) 井上 (1976) はこの他、「信じる」も非叙実述語の例として挙げている。(同書、p.252)
- 9) 橋本 (1990) は、「の」「こと」の分布に絡めて<対象となること>と<生産されることがら>を区別しているが、本稿の<対象命題><産出命題>と同じではない。
- 10) 「考える」は実際には対象命題をとることもある。下の注13を参照のこと。
- 11) 規範的構造具現 (canonical structural realization (CSR)) については、Chomsky (1986) 等を参照のこと。本来の CSR は、「CSR (proposition) = CP」のように意味選択から範疇選択を派生するものであるので、(18) のように「こと」「と」といった個別の語彙項目を指定することには、厳密には問題がないわけではない。
- 12) もちろん、命題として解釈されうる名詞句に限られる。
- 13) 「ユイの激怒を浮気のせいだと早合点した」のような句を作ることはできるが、これは名詞句だけをとる構造とは異なる。また、「考える」は実際には「立候補することを考える」のように対象命題をとることもあるが、その場合は「可能性を考慮する、計画を考える」に近い意味に限定され、「立候補を考える」のように名詞句もとれる。
- 14) 「そうあるべきだ」のような例外は存在する。ただしこの場合も「*そうある」は容認性が低い。
- 15) 一方、「知る」以外の「と」をとる述語はすべて「そう」と共起できるようである。固定叙実述語である「悟る」「見抜く」などは中核的な意味においては「知る」とさほど変わらないと考えられるが、にもかかわらず「そう悟った」「そう見抜いた」と言える。したがって、「知る」と「悟る、見抜く」などの差がどこにあるかについては、さらに詳細な意味記述が必要であろう。これについては後の考察に期する。

参考文献

- 阿部 忍 (1999) 「引用節のタイプ分けに関わる文法現象」『山手国文論攷』第20号、pp.47-62、神戸山手女子短期大学国文学科
- 阿部 忍 (2003) 「補文標識「の」「こと」に関する若干の考察」『山手国文論攷』第23号、pp.35-47、神戸山手女子短期大学日本語・日本文化学科
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (上)』大修館書店
- 久野 暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法 6 第11部 複文』くろしお出版
- 橋本 修 (1990) 「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」『国語学』163、pp.1-12、国語学会
- Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origins, and Use*, New York: Praeger.